

京都大学	博士（文学）	氏名	岸本 廣大
論文題目	重層的な古代ギリシアの共同体に関する研究 —コイノン・エトノス・ポリス—		
（論文内容の要旨） 本論文は、古代ギリシア世界において、人々が生活した共同体がいかなる構造や連関をなしていたのかを、一般に「連邦組織」や「都市同盟」と理解されてきたコイノンに焦点を当てて解明しようとしたものである。従来の古代ギリシア史研究は、地中海東部地域に叢生したギリシア人特有の都市国家、ポリスを中心に解明がなされ、歴史像が構築されてきた。しかし、論者は、ポリスなど複数の共同体から構成されるコイノンに着目し、ポリスを中心とした従来の古代ギリシア世界像を、より幅広い歴史的文脈に位置づけ直そうと試みる。 ところで、コイノンとそれに属する諸共同体との関係については、J. A. O. Larsen が1968年の著書で示した「エトノスからコイノンあるいはポリスへ」というモデルに従って長らく理解されてきた。Larsenモデルでは、部族制国家のような共同体であるエトノスがコイノンかポリスへと発展すると考えられた。しかし、近年のポリス研究やエスニシティ研究の進展によって、ポリスの定義もエトノスの解釈も変更を迫られ、その結果、Larsenの発展モデルはもはや成立しえなくなった。論者は、かかる研究の進展によって宙に浮いたエトノス、ポリス、そしてコイノンの三者とその関係を、新たに解明し構築し直そうとする。それは、ポリスだけでなく、様々な共同体を全体として捉え、新しい古代ギリシア世界像の提示へとつなげようとする試みである。また、三者の関係の考察を通して、コイノンとは何であったかという本質的な問題にも取り組んだ。 本論文冒頭の序章で、論者は古代ギリシア史研究、そして焦点を当てるコイノンそのものの研究史を紹介・検討し、上述した本論文の目的をより詳細に説明する。本文は2部に分かれたれ、まず第1部で、コイノン、ポリス、そしてエトノスとその連関を解明する。第2部は、第1部での研究の成果を踏まえて、いわゆる古代ギリシアの時代が過ぎたのちのコイノンの実態やその解釈に光が当てられる。具体的には、ギリシア世界を支配下に置いたローマ帝国時代において、コイノンはどのように存在しえたのか、また近現代において、古代のコイノンがどのように理解され解釈されたのかを追究している。最後に、終章で、本論文全体の検討成果を踏まえて、論者なりの古代ギリシア史に関する新たな歴史像の説明を試みている。以下、章ごとに内容を紹介する。 第1部第1章では、古代ギリシア、ボイオティア地方に成立したコイノンを対象に、「独立」あるいは「自治」を意味するアウトノミアの観点からコイノンとそれに加盟するポリスとの関係を考察する。論者によれば、アウトノミアは前5世紀半ば以降に			

「独立」を意味するようになったが、その後「独立」の意味が有名無実化したことにより、前4世紀末には「自治」へと意味が変化した。ポイオティア人のコイノンにおいて、「独立」の意味でのアウトノミアは、コイノンや外部の有力ポリスに対して、加盟ポリスが自らの立場を優位にし、あるいは不利な立場を避けるために用いられた。それは、加盟ポリスの「独立」をある程度制限せざるをえないコイノンの制度的な欠陥を指摘する言葉であり、コイノンとポリスの緊張関係が高まった時に表面化する、両者の対立関係を表す言葉であった。論者は、ポリスという国家形態にとって本質的な要素となると考えられてきたアウトノミアについて、コイノンを通じて以上のように分析し、実態を明確にするのである。

第1部第2章は、アイトリア人のコイノンにおける市民権制度に着目し、コイノンとポリスの関係について別の側面を考察する。論者の分析によれば、前3世紀に興隆したアイトリア人のコイノンは、これまで交流がほとんどなかったエーゲ海地域と接触を図る際、加盟ポリスの市民権をコイノンの市民権と無条件に連動させることによって、前者の付与だけでコイノンとの迅速な外交関係の構築を可能としていた。しかし、前220年代以降、コイノンの領内でも戦争が頻繁に起こる状況になると、無秩序な市民権拡大を防ぐために、ポリスの市民権とコイノンの市民権の両者を連動させない形の付与手続きがコイノンによって用いられた。論者は、コイノンによるプロクセニアの付与とそれを保証するエンギュオスについての考察も合わせて、コイノンと加盟ポリスとが、互いの市民権制度に影響関係を与え合っていたこと、つまり、対立とは異なる両者の密接な関係が明らかとなったと結論する。このように、論者は、市民権という、これまたポリスの本質に繋がるとされて論じられてきた要素について、ポリスそのものとは異なる視角から有益な結論を導き出している。

第1部第3章では、アカイア人のコイノンを対象に、コイノンとエトノスの関係を考察する。従来、コイノンの前段階としてネガティブに評価されていたエトノスは、近年のエスニシティ研究によって、血縁や文化といったアイデンティティを共有する集団として捉え直されている。論者は、アカイア人のコイノンの下で、地域的なアイデンティティに基づく7つのエトノス（アルカディア、アカイア、エリス、メッセニア、ラケダイモン、アルゴリス、地峡地域）が並存していたことを確認した上で、コイノンの公職者がこれらのエトノスを単位として割り当てられていたことを明らかにする。そして、碑文における「アカイア人のコイノン」の使用や、アカイアのエトノスの中心地で招集されていたコイノンの議会を各ポリスの持ち回りとした議会改革を踏まえて、エトノスは、コイノンにとって統合の対象である一方、コイノンとの緊張関係を避けるために一定の配慮が必要な存在でもあったと結論する。

以上の三章を踏まえて、論者は以下のように総括している。すなわち、Larsenの学説とは異なり、コイノン、ポリス、エトノスは同時に存在し、またある共同体がその三者のいずれにも属するという点で、古代ギリシア世界の共同体は重層的な関係に

あった。しかし、コイノン、ポリス、エトノスの関係は、単に上から下への一方的な関係にあったわけではなく、ポリスやエトノスもまた、コイノンに影響を与えるという意味で、双方向的な影響関係にあった。コイノンとは、そのようなポリスやエトノスとの多様な関係の上に成り立つ共同体であり、その三者の関係こそがコイノンの本質であった。そのような関係を、論者は「重層的な共同体モデル」と概念化し、それによって各コイノンの特徴も明らかになるとする。

第2部では、冒頭第4章において、ギリシア世界を支配下に置いたローマ帝国時代のコイノンが扱われる。論者は、ローマと比較的良好な関係を築いていた小アジアのリュキア人のコイノンを対象として、コイノンの役割と公職制度の観点からローマの支配前後の変化を明らかにしている。論者によれば、ローマの支配以前、コイノンは外交や軍事、経済や司法、そして宗教的な役割などあらゆる機能を担っていた。一方、ローマの支配下では、軍事的な役割が失われ、コイノンの役割は内政に限定された。同様に、公職制度においても、軍事的な役職がローマ時代に姿を消すと共に、新たに宗教的役職が重要な地位を占めるようになった。そのような実質的な変化を被りながらも、紀元2世紀には既に機能しなくなっていた軍事的な役職に肯定的な文脈で言及し続けるなど、リュキア人はかつてのコイノンの枠組みを「伝統」として積極的に維持しようとしていた。政治的な独立を失ったローマ帝国支配下でも、コイノンの本質としての重層的な共同体の関係は継続しており、むしろローマ帝国自体もその重層性の中に組み込まれうる存在であった。以上のように、論者はギリシア世界がローマ統治下に入ってからのも存続したコイノンの役割を明確化している。

第2部第5章では、古代ギリシアのコイノンが近現代世界においてどのように理解され、受容されたのかを分析する。現代では、コイノンは「連邦組織」として理解されることが一般的である。そのため、論者は、アメリカ合衆国やヨーロッパ連合（EU）など具体的な関連事項を取り上げつつ検討している。古代において独自の共同体とみなされることがほとんどなかったコイノンは、18世紀末のアメリカの憲法制定過程において、連邦国家と絡めて言及された。そして、取り上げる者の都合のよいように様々に用いられる中で、特に連邦国家の祖形としての高い評価が定着することによって、コイノンと連邦国家の同一視が一般的になり、その後のコイノン研究の方向性を規定した。論者はこのように述べ、そのような近代的な見方を相対化し、そこからの脱却を図ろうとする研究も近年はみられるものの、それもまた、「今」という時代の制約を受けていると語る。さらに、論者はEUについてのマルチレヴェル・ガヴァナンス論を取り上げながら、時代的な制約を自覚しつつも、むしろそれを問題意識共有のあらわれと捉えて、時代や学問分野の垣根を越えた議論の促進に敢えて利用していくという、今後の受容の方向性を提案している。

以上の、コイノンの「その後」を扱った第2部を通じて、論者は古代ギリシアのコイノンが近現代とも深い関わりを有していたことを確認する。さらに、コイノンは近代

的な国家からみれば異質であるがゆえに、未来へと変わりゆく「今」において、新たな参照枠となりうると論者は述べ、第2部の総括において、それが古代史研究ひいては歴史学の重要な意義として提示されうると述べている。

末尾の終章で、論者はこれまでの議論を総括し、改めて「重層的な共同体モデル」を古代ギリシアの新たな歴史像として提示している。それは、ローマ帝国時代をも含みこむ可能性を秘め、古代という時代を特徴づけるものになりうるとする。一方では、第2部で論じたように、近現代におけるコイノンの受容からは、西洋古代史を通じて「今」を考える視座を提供することもできるとしている。

(論文審査の結果の要旨)

古代の地中海東部地域には、ギリシア人特有の都市国家、ポリスが数多く成立して繁栄し、アテナイなどで高度の文化を生み出した。古代ギリシア史の研究は、このポリスの構造や性格を解明することを主要課題とし、かつ史料にも恵まれている有力ポリス、アテナイの分析を研究の中心としてきた。しかし、1990年代以降、コペンハーゲン・ポリス・センターの大型プロジェクトなど研究の進展の結果、従来のポリス研究、ポリス像は大きな転換を迫られるようになった。ポリスといえば、独立・自治の都市国家とされてきたが、紀元前4世紀後半のマケドニア王国による征服以前の時期にあっても、ほとんどのポリスはデロス同盟、ペルシア帝国など、より強力な勢力に従属し、「独立」がポリス存立の必要条件ではなかったこと、「自治」はマケドニア王国による征服ののちも継続し、ローマ帝国支配下でも自治都市としてのポリスは栄えていたことなどが明らかにされた。さらに、ギリシア世界に見られたポリス以外の共同体に着目する研究も現れた。本論文は、こうした学界動向を踏まえて、古代ギリシア世界に存在した共同体のあり方を根本から再検討し、古代ギリシア世界像を新たに構築しようと試みた意欲的な研究である。

論者は、研究の中心にコイノンを置く。コイノンとは、わが国では「アカイア同盟」「アイトリア同盟」などとして知られる、一般に連邦ないし都市同盟と解釈されてきた組織で、ポリスなどが集まってできたものである。このコイノンについては、ポリス研究との関係で欧米学界では研究がなされてきたが、とくに1968年のLarsenの研究が重要で、その後のコイノン解釈の定説となった。彼は、ギリシア人の共同体が原始的な部族国家的共同体であるエトノスからポリスあるいはコイノンへ発展したというモデルを提示したが、そのモデルでは、ポリス、コイノン、そしてエトノスの三者を全く別の共同体と考えており、また「独立した」ポリスとコイノンに加盟して「従属した」ポリスとを明確に区別していた。しかし、研究の深化によって、ポリスの定義にとって「独立」が必要条件とならなくなり、またエスニシティ研究の進展によって、エトノスの理解にも変化が生じた。こうした点を踏まえて、論者はLarsenのモデルはいまや有効性を失ったとし、ポリス、エトノス、コイノンの三者をどのように理解すればよいかを検討する。

本論文は、序章において、研究史を批判的に検討して問題の所在を明確にしたのち、第1部の諸章で、古代ギリシア人の共同体を考える上で必須のテーマである「独立」と「市民権」の問題を、代表的なコイノンの事例を検討して論ずる。どのようなポリスがコイノンに加盟していたかの調査から始めて、コイノンに属したポリスの「独立」とコイノンとの関係を精査した。また、ポリスの市民権とコイノンの市民権の関係も詳しく調べている。さらに、アカイア人のコイノンの事例を検討しつつ、このコイノンに加盟するエトノスがコイノンでどのような役割を果たしていたかを分析する。「独立」を意味するアウトノミアの語の使用例やコイノンに加盟したポリスの検出、コイノンの役職者の出身ポリスや出身エトノスの調査などにあたっては、文学作品だけでなく、出土したギリシア語碑文を史料として多用し、精緻なその分析は結論

に安定した根拠を提供している。

こうした分析と考察によって、本論文は次の点で注目すべき成果を上げたといつてよい。すなわち、Larsenの学説とは異なり、コイノン、ポリス、エトノスは同時に存在し、またある共同体がその三者のいずれにも属するという点で、古代ギリシア世界の共同体は重層的な関係にあったこと、さらに三者は双方向的な影響関係にあり、コイノンとはそのようなポリスやエトノスとの多様な関係の上に成り立つ共同体で、三者の関係こそがコイノンの本質であったことを明らかにした点である。論者が研究成果に基づき提起した「重層的な共同体モデル」の下で描き出す古代ギリシア世界像は、従来のポリス中心主義、アテナイ中心主義的な研究手法や解釈を超える新たな歴史像構築への大きな一歩を示していると評価できる。

本論文第2部では、いわゆる古代ギリシアの時代が過ぎたのちのコイノンの実態やその解釈に光が当てられ、ギリシア世界を支配下に置いたローマ帝国の時代において、コイノンはどのように存在しえたのか、また近現代において、古代のコイノンがどのように受容され解釈されたのかを追究している。論者によれば、18世紀末のアメリカの憲法制定過程において、コイノンは連邦国家と絡めて言及され、その祖形としての高い評価が与えられた。そして、コイノンと連邦国家の同一視が一般的になり、その後のコイノン研究の方向性を規定した。その後、そうした近代的な見方を相対化し脱却を図ろうとする研究もみられたものの、それもまた時代の制約を受けている。論者はこのように観察し、ヨーロッパ連合やドイツの連邦について解説しつつ、時代的な制約を自覚しつつも、むしろそれを問題意識共有のあらわれと捉えて、時代や学問分野の垣根を越えた議論の促進に取って利用していくべきとする、今後の受容の方向性を提案している。単なる研究史、学説史を超えて、西洋古代史研究の射程と意義を明示しようとした試論として貴重である。

資料を渉猟し、精緻な分析と考証を重ねた本論文の成果は、歴史学界への大きな貢献となるとともに、新しいギリシア史研究のあり方を提示するものとして、今後重要な位置を占めることになるだろう。従来の主要な学説に取って代わる画期的な提案を含む論者の研究は、国際的な独自性と波及効果も持つ。ただ、コイノンを中心に考証したゆえにやむをえないところではあるが、論者の描くギリシア世界像が有力ポリスたるアテナイ、スパルタとどのような関係にあるのか、もう少し詳しく説明する必要がある。また、近現代のコイノン理解の検討の際に取り上げられたヨーロッパ連合やドイツの連邦の議論についても、近世の組織にまで遡り、より詳細な検討が求められよう。ただ、こうした課題は、論者の今後の研究で果たされることは間違いない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2016年1月28日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。